

これからの教育に求められるもの

宮澤 好一^{a)}

a 学校法人 成田会 理事長

1 はじめに

教育基本法が施行され 80 年、改正されて 20 年が経つ。

子どもたちの知・徳・体を一体で育む日本型学校教育は優れた点が多く、高い学力水準を誇り、学力の地域格差も少ないなど、国際的にも高く評価されてきた。そうした従来の日本型学校教育の成果を踏襲しながら、学校現場を取り巻く環境や時代の変化に対応できるように発展させていこうという考えが、「令和の日本型学校教育」の背景としてある。

我が国の教師は、子どもたちの主体的な学びや、学級やグループの中での協働的な学びを展開することによって、自立した個人の育成に尽力してきた。その一方で、我が国の経済発展を支えるために、「みんなと同じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、「正解（知識）の暗記」の比重が大きくなり、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成するため、他者と協働し、自ら考え抜く学びが十分なされていないのではないかという指摘もある。

（令和 3 年 1 月 26 日 中央教育審議会）

私たち教員は、以上のような学校教育を受けてきた。

「お世話になった先生のようにになりたい」若い教員の口からよく聞く言葉である。自分が受けてきた教育がその人の教育観・学習観の基になって

いて、多くの教員が、その原体験を良しと考え子どもたちの前に立っている。しかし、「令和の日本型学校教育」はその教育観からの脱却を求められているのである。

今までの私自身の教師人生を振り返った時に、まさしくこの原体験が基となった指導こそ大事という考えがあったように思う。

服装の統一、無言で行う清掃、あいさつ、全員が大きな声を出して歌うことを求めた合唱、毎日の提出ノート（出さないで罰あり）、正答を覚えさせる指導等々、自分が学校生活で受けてきた教育を、教員になって同じように繰り返してきたように思う。

画一的であり、ある意味やらせる指導、この教育の成果はとても多くあったと思われるし、日本全国どこでも当たり前の教育のあり方であった。これが、国際的にも認められる高水準の学力を培い、美しいとされる日本人の所作を身に付ける基となっていることが言うまでもない。

現在「正解（知識）の暗記」の比重の大きさより、「自ら課題を見つけ、それを解決する力」を育成し、他者と協働しながら自ら考えぬく学びを実現させていく比重を大きくしていく必要性が指摘をされる中、自分の教育を見返すきっかけとなったあるつたない実践を紹介する。

2 つたない実践より

「主体的な態度で授業を受けることで、生徒たち

はより多くのことを学び、学力を伸ばしていく。」

主体的に学ぶ意欲を高めていくことが、学習の大前提にある。そのために、教師は教材を研究したり、指導法を検討したりしている。そんな多くの時間を教材研究に当てている。

教材とは、場の設定にあると自分は考えている。場には、発問、展開、切り返し、グループ・ペア学習のあり方、教具の開発、板書のあり方等、様々なことがある。

私は、中学・高校・小学校のどの授業でも基本的に、グループ・ペア学習を取り入れてきた（35歳位？から特に）。以下に、保健体育「陸上競技短距離走」の授業の実践を示す。自分自身、教材開発（場の設定・・・グループ学習の有効性）の大切さに気づいた授業である。

「生徒の走力をどう伸ばすか」

今までの短距離走の授業であれば、腕の振り方や腿を上げたり、ストライドを考えたりする脚の使い方、スキップ等を取り入れた走り全体のバランスやリズムについてと、いわゆるお決まりの指導が中心であった。それなりに、生徒たちの走りのフォームは改善し、タイムも縮めることができた。

短距離走は、個人競技であるので、自分の課題に対して、各自が努力をして課題を解決していくようにするのが当然なのだと考え、そのために、一人一人の課題を解決できるような手だてを助言しながら授業を行っていた。生徒に自分のフォームについての分析等を考えさせる場は設けたが、従来の教師主導の授業形態を繰り返していた。

しかし、生徒たちは、それほど記録の向上に固執することなく、他の球技に比べると、意欲面での差も見られた。また、走ること自体を好まない生徒も見られた。まさしく「やらされている授業」であった。

「友とのかかわりのなかで走力を伸ばしていった生徒」

めざす姿に近づいた達成感やチームの一員として貢献することができた所属感を実感することができれば、主体的に授業に取り組むだろうと考え、リレーの学習を位置づけた。1年生ではリーダーを中心に、2・3年生では4つの係（リーダー・コーディネーター・トレーナー・コーチ）の立場からの提案をもとに、チーム学習の進め方、課題設定の仕方、運動条件の工夫の仕方を学ばせた。

生徒は自分たちのチームの記録を向上させるために、練習法を考えたり、アドバイスをし合ったりしてタイムトライアルを繰り返し、チームのために、全員が自分自身のできる精一杯の力を発揮しながら、記録の向上をめざしていった。

単元の終了時に、50m走のタイムをとると、全員がタイムを大幅に縮めていた。

集団の力を伸ばすために、個人が努力をする。そうすることで、集団の力が高まり、個人の力も高まっていた。そして何より、生徒たちの学ぶ意欲や主体性も高まっていた。

生徒のそんな姿に触れて、私も含め、保健体育科の教師全員が、個人種目・集団種目という固定観念から脱却することのできた教材化の奥深さを感じ、仮説を立てて研究に取り組んできた成果を実感できた。

子どもたちの主体的な学びを伸ばすためには、様々な方面から教材と向き合い、教材化のあり方について常に考えていくことが大切であると改めて考えさせられた授業であった。

3 おわりに

明治維新以後、近代学校制度によって、教育内容が全国で一律され一斉指導が始まった。教科書がない時は、教師が板書や掛図を指して、子どもたちに正解を教え、子どもたちはそれを一人ずつ復唱し、全員で一斉に声を揃えて読む、というような教授法がなされていた。一斉指導が始まった当初はまさにこのような状況だった。戦後教育も、我が国の経済発展を支えるために、「みんなと同

じことができる」「言われたことを言われたとおりにできる」そんな勤勉な労働者を輩出することで、日本経済は発展をしてきた。まさしく「JAPAN AS NO1」「世界的な信用 MADE IN JAPAN」を生み出した。

しかし、人工知能等の先進的な技術があらゆる産業や社会生活に取り入れられた Society5.0 時代の到来を迎え、社会のあり方そのものがこれまでとは劇的に変化している。まさしく先の読めない時代を迎えている。私たち一人ひとりが答えのない問題にどう立ち向かうのかが問われており、その場その時その状況に応じた事象から、解決すべき課題を見だし、主体的に考えながら多様な考えの者と共に協働的に議論し、より良い改善策を生み出していかなければならない。

今、学校には、そのような力の育成が求められている。特に社会に直結した専門学校の役割はとて大きいように思う。教員には、自身が受けてきた教育とは違うものが求められており、教育者の意識の改革が求められている。

そして、学校には「その学校の中で、そこにいる学生にその力を付けていく責任」が求められているのである。